

よろずは

平成二六年

十二月

歌碑めぐり 10

飛鳥資料館から約300m東に山田寺跡という史跡があります。山田寺は大化の改新で活躍した蘇我倉山田石川麻呂が発願した寺院ですが、彼は寺の完成を見ずに亡くなります。その死は中大兄皇子(のちの天智天皇)が讒言を信じたことによるものでした。しかもそのあとを追うように、石川麻呂の娘で中大兄の妃であった造媛も亡くなります。ちなみに造媛は持統天皇の母親にあたります。

『日本書紀』によれば、中大兄は造媛の死を嘆き悲しみ、野中川原史満が二首の歌を奉ったとあります。ひとつは「山川に鴛鴦が二羽ならんでいるように、仲睦まじかった妹を誰が連れ去ったのか」、もうひとつは「一株ごとに花は咲いているのに、どうして愛しい妹が再び咲かないのでしょう」という歌です。それをきいた中大兄は「善きかな、悲しきかな」といい、御琴を授けて唱わせたそうです。

現在、この二首を刻んだ歌碑が石川麻呂ゆかりの山田寺跡にあります。揮毫者は奈良県出身の歌人である前川佐美雄氏です。

【万葉古代学係】



【碑銘の翻刻】
山川に鴛鴦二つゐて偶ひよく
たくへる妹を誰か率にけむ
もとことに花は咲けとも何とかも
愛しい妹かまた咲き出こぬ
野中川原史満 佐美雄「印」

タイトルの「よろずは」は、「万葉」を訓読みしたものです。

山田寺跡 (奈良県桜井市)